

# 「はやわざくらべ」

(西谷にまつわるお話)

小倉南区

むかし、合馬川のほとりの西谷村におぎんという娘がいました。  
たいそう器量よしのうえ、働き者でしたから、あちらこちらの村  
から嫁にほしいと縁談がきました。  
しかし、どんなによい話がきても、おぎんは、なかなか首を縊に  
ふりません。

「わたしは、ぐずな人がすかん。わたしよりも、すばしっこい人で  
なければ、嫁にはいかん。」

近くの三岳村の伝作も、この評判を聞き、「そんなにいい娘なら、  
ぜひ、わしが嫁にもらいたい。」と申し出ました。

「早わざくらべで、わたしに勝つたら、嫁にいつてもええ。」  
と、おぎんが返事をしました。

伝作も、すばしっこでは自信がありましたから、「よし。」と、  
勝負を引き受けました。

早わざくらべは、夜明けから日暮れまでに、おぎんが着物を一  
枚、伝作が納屋を一けん作ることで競うことになりました。

さて、次の朝、朝六つ（午前六時）の鐘と同時に、早わざくらべが  
始まりました。

おぎんは、さつとたすきをかけると、畑に出て綿をつかみ、あつと  
いう間に糸につりました。そして糸をそめて、布をおり、夕方まで  
に着物を一枚作り上げてしまいました。

一方の伝作も負けてはいません。山に入り、木を切ると、ノコとカ  
ンナで柱と板を作りました。地ならしをし、柱を立て、みるみるう  
ちに納屋を作り上げていきました。

早わざくらべを見ていた村人は、二人のすばやさに目を白黒させた感心するばかりです。

「あと少しや。伝作、がんばれ。」

とうとう、暮六つ（午後六時）の鐘になりました。伝作は、仕上げのかべぬりに入つてしましたが、納屋のすみだけが少し残ってしまいました。早わざくらべは、おぎんの勝ちになりました。



「お前さんのようにぐずな人のところへは、わたしは嫁にはいかん。」  
おぎんは、そういうと伝作の申し出を断りました。

負けた伝作も、約束ですから、あきらめて、おぎんを馬に乗せて家までに送ることにしました。さて、帰り道、合馬川ぞいの道をとぼとぼと歩いていると、夜道のせいか、馬が道のくぼみにつまづき、あつという間に、おぎんが馬から放り出されてしまいました。

そのときです。伝作は、こしのカマをすばやく抜くと、土手の女竹を刈り取り、さつとさくと、三岳名物のエビショウケを作り、おぎんの体が地に着く前に受けとめました。

おぎんは、伝作のすばしつこさを見直し、「ぜひ、わたしを嫁にしておくれ。」と頼みました。

そして、二人は夫婦になり、三岳村でたいへん仲むつまじく暮らしたということです。